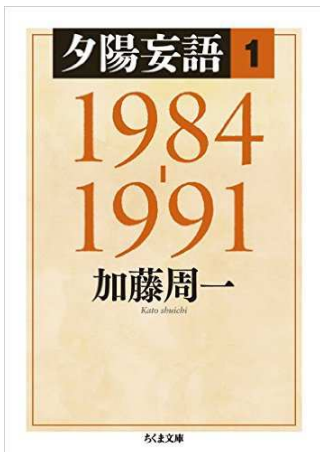


「夕陽妄語^{せきようもうご} 1」 加藤周一



◆1984年7月から2008年7月までの四半世紀、全285回、毎月1度、朝日新聞の夕刊に連載された加藤周一さんの時評エッセイです。(1～3巻あります) 加藤周一さんは平和憲法擁護・九条の会の呼びかけ人です。

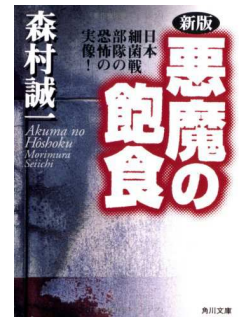
2008年12月89年の生涯を閉じられました。

◆2007.07「夕陽妄語」について、「夕陽」は、私が好むのは長い年月の間に楽の茶碗夕暮に滲み出す微妙な色調であり、沈みゆく町に沈む夕陽の最後の輝きであり、あらゆる価値に対する懐疑主義である。

「妄語」は、心にうつるよしなごと、ということです

◆2007.09では1937年におこった中国侵略で、日本帝国陸軍が大量の毒ガスを実践に用いたこと、細菌兵器の人体実験について当事者の証言を集めて記事を連載した、森村誠一「悪魔の飽食」が出てきます。

◆歴史の見方において、南京大虐殺や愛国心の話から、家の外でも抑制があり、家の中でも単に従順ではない個人をいかにして育てるか。文化的成熟とは、みずからを批判して、みずからを笑うことのできる能力である。徳川時代の狂歌師にはそれがあった。いつの世の中でも、大真面目の自慢話ほど、幼稚で愚劣で、しかも危険なものはない。



◆日本の画家たちは画家＝彫刻家ではなく、彼らの画面は装飾性への傾向を常に内在させていた。マティスは画家＝彫刻家であって、常に対象の量感をもとめていたのである。幸にしてわれわれの時代は、一方でアウシュヴィッツやヒロシマを含むと同時に、他方ではまたマティスの画業を含むのである。(写真はロザリオ礼拝堂)

◆大岡昇平は、戦争についての発言を集めた「証言その時々」などにおいて、太平洋のいくさの末期、フィリピンで死んだ敗戦の日本軍部隊の仲間たちに「化けて出てくれ」と呼びかけた。反戦反軍備を、生き残った日本国民に訴えるためである。

その時生まれていなかったということは、過去の戦争に対する責任を解除するはずだが、過去の戦争とその結果の現在における意味を理解しないこと責任までは解除しない。人民は侵略戦争を支持し、その悲惨な結果に無関心でありえる。

たしかに明るい話ではない。しかしそういうことを知った上で、それでも戦争や核兵器に反対する何人かの個人が常において、死んだ仲間たちに呼びかけ、化けて出てきても戦争反対の志を伝えてくれ、ということもある。だから少しは明るいのである。

◆ルネ・ドゥ・ベルヴァル、人間と宇宙との関係を定義する形式の一つが、詩である、と考えていたらしい。高度成長期以後の日本社会の金もうけ主義を痛烈に批判し、ある優しさをもって遠いインドシナの自然と人々とを語っていた。仏教もまた、個人と宇宙との関係を定義する一個の思想的装置と解することができる。バカな操り人形でなければ、孤独でない人間などいない。その原理とななにか。それは精神の自由としか言いようのないものである。(案内：黒野晶大)